

## 〈短報〉

新産地報告：長野県小谷村の伝統的カヤ場に生育する  
オオナンバンギセル *Aeginetia sinensis* G.Beck

井田 秀行\*

New locality of *Aeginetia sinensis* G.Beck in a traditional semi-natural grassland producing thatching material in northern Nagano Prefecture, central Honshu, Japan. Hideyuki IDA\* (Institute of Nature Education in Shiga Heights, Shinshu University. \*Faculty of Education, Shinshu University, Nagano 380-8544, Japan, E-mail: pida@shinshu-u.ac.jp). *Bulletin of the Institute of Nature Education in Shiga Heights, Shinshu University* 52: 15-16 (2015).

オオナンバンギセル *Aeginetia sinensis* G.Beck (別名ヤマナンバンギセル) は、ハマウツボ科ナンバンギセル属の植物で本州・四国・九州・沖縄・中国(中部)に分布する(佐竹ほか 1981; 大井・北川 1992)。日本に自生する同属は本種とナンバンギセル *A. indica* L. var. *sekimotoana* (Makino) Makino の2種のみである。いずれもススキ *Miscanthus sinensis* Andersson, ヒメノガリヤス *Calamagrostis hakonensis* Franch. et Sav., ササ属 *Sasa* sp. (解語 2004) などの株元に寄生する。

オオナンバンギセルは、草丈(花梗の長さ) 20~30cm, 萼の長さ2.5~4cm, 花期は7~9月, 花冠は明るい紅紫色で大きく, 長さ4~6cmになる(大井・北川 1992)。全体に大型で萼の先が鈍く, 花冠裂片の縁に細かい鋸歯があることでナンバンギセルとは区別される(久原 2008)。

長野県では中・南部で確認されているが, 長野県北部での自生地はこれまで未記録であった(長野県植物誌編纂委員会 1997)。主にススキ草地のような単一な植生の株元に寄生するため, 全国的にも自生地の報告は多くない(例えば, 久原 2008)。現在, 25都府県のレッドリストに記載されており(日本のレッドデータ検索システム <http://www.jpnrd.com/index.html> 2015年2月11日確認), ススキ草地などの二次草原(半自然草地)の減少に伴い, 今後も絶滅が危惧される。長野県では絶滅危惧IB類に指定されている(長野県 2002, 2014)。

著者は2007年8月, 長野県北安曇郡小谷村に残る伝統的カヤ場のススキ群落内においてオオナンバンギセルの生育を確認した(池谷・井田 2008)。また,

同じ場所で2013年8月にも再度確認したので今回, ここに報告する。

新産地は, 長野県小谷村千国にある通称“牧の入カヤ場”(北緯36度45分52秒, 東経137度51分44秒; 標高約900~1200m; 約31.4ha, 写真1)である。カヤ場は二次草原を代表する植生景観であり, 主に屋根葺き用のカヤ(ススキやカリヤス *M. tinctorius* (Steud.) Hack.などのイネ科草本の総称)の採取を目的とする。周辺一帯ではかつて多くのカヤ場が分布していたが, カヤの需要減少に伴い大半がスキー場に転用された。その中で唯一残されたのが牧の入カヤ場である。江戸時代には, 小谷村一帯のカヤ場で採れるカヤが松本藩から重宝されていた(西山 2005)。カヤ場の維持に不可欠な火入れ(野火つけ)は現在も千国集落の住民によって伝統的になされており, 毎年消雪後の4月ないし5月に火入れが行われ, 刈り取り時期は10月下旬~11月上旬である。当地では昔からススキが通称“大ガヤ”, カリヤスないしオオヒゲナガカリヤスモドキ *M. intermedius* (Honda) Honda が“小ガヤ”と呼ばれ, 屋根材として良質な“小ガヤ”の方を優先的に残し, 育てる目的でカヤ場の維持がなされてきた(西山 2005)。しかし近年になって“大ガヤ”が増殖し, 良質な“小ガヤ”の分布域が縮小しているという(池谷・井田 2008)。

当該カヤ場を優占するのはススキ属(主に, ススキ, カリヤス, オオヒゲナガカリヤスモドキ)であり(小谷ほか 2014), オオナンバンギセルが確認されたのは草丈1.5~1.7mのススキおよびカリヤス群落中であつた。イネ科以外では, ワラビ *Pteridium aquilinum* (L.) Kuhn subsp. *japonicum* (Nakai) Á. et D.Löve, ヤマハギ *Lespedeza bicolor* Turcz., ヒヨドリバナ *Eupatorium makinoi* T.Kawahara et

\* 信州大学教育学部附属志賀自然教育研究施設(別刷請求先 信州大学教育学部 〒380-8544 長野市西長野6のロ E-mail: pida@shinshu-u.ac.jp)



写真1. オオナンバンギセル自生地付近の様子（長野県小谷村千国“牧の入カヤ場”）。



写真2. 長野県小谷村“牧の入カヤ場”に自生するオオナンバンギセル *Aeginetia sinensis* G.Beck  
a) 生育状況, b) 花

Yahara, フジ *Wisteria floribunda* (Willd.) DC., ツリガネニンジン *Adenophora triphylla* (Thunb.) A.DC. var. *japonica* (Regel) H.Hara 等が出現する（池谷・井田 2008）。2013年8月1日に行った現地踏査の結果、オオナンバンギセルはススキ属群落中の10m×10mの範囲内に1～3個の株で散在し、蕾ないし開花状態にあった（写真2）。

オオナンバンギセルの維持には、毎年の火入れで維持されるススキ属が重要な役割を果たしていると言える。黒木ほか（1970）は、ナンバンギセルの寄生がススキの発育、特に分けつを強く抑制する可能性を指摘している。屋根ガヤとして良質なものは分けつの少ないものであるため、ナンバンギセル属の寄生が、良質なカヤの生産に寄与している可能性もある。

現地調査にあたっては、(株)小谷屋根の方々のご協力を頂きました。この場を借りて感謝申し上げます。本文中の学名は、米倉浩司・梶田 忠（2003-）「BG Plants 和名-学名インデックス」(YList), [http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist\\_main.html](http://bean.bio.chiba-u.jp/bgplants/ylist_main.html)（2015年2月11日確認）に拠った。本研究は、JSPS 科学研究費25340107の助成を受けたものである。

#### 引用文献

- 池谷友希子・井田秀行（2008）長野県小谷村に残る伝統的茅場の植物相 信州大学教育学部附属志賀自然教育研究施設研究業績 45：1-6.
- 解語 玄（2004）ササに寄生するナンバンギセルとオオナンバンギセル 富士竹類植物園報告 48：39-42.
- 久原泰雅（2008）県立植物園周辺で確認されたオオナンバンギセル 新津植物資料室年報 2007：36.
- 黒木晴輝・首藤三吾・田畑句子・田島良男（1970）ナンバンギセルによるススキの生長阻害（予報）鹿児島大学農学部演習林報告 2：67-69
- 長野県（2002）長野県版レッドデータブック 長野県の絶滅のおそれのある野生生物 維管束植物編，長野県，長野.
- 長野県（2014）長野県版レッドリスト 植物編2014改定版，長野県，長野.
- 長野県植物誌編纂委員会（1997）長野県植物誌 信濃毎日新聞社，長野.
- 西山哲雄（2005）茅場：小茅をそだててきた人々 棟柱：信州伝統的建造物保存技術研究会調査報告 8：79-88.
- 大井次三郎・北川政夫（1992）新日本植物誌 顕花植物編改定版，至文堂，東京.
- 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫編（1981）日本の野生植物 草本Ⅲ 合弁花類. 平凡社，東京.